

一景話題

泉鏡花

青空文庫

夫人堂

神戸にある知友、西本氏、頃このごろ日、摂津国摩耶山の絵葉書を送らる、その音信おとずれに、

なき母のこいしさに、二里の山路をかけのぼり候。髪たなび鬔なびき渡る霞の中に慈光あまね治なき

御姿おんを拝み候。

しかじかと認められぬ。見るからに可懐なつかしさ言わんかたなし。此方こなたもおなじおもいの身なり。遥はるかにそのあたりを思うさえ、端麗なるその御姿おんの、折からの若葉の中に梢こずえを籠こめたる、紫の薄衣うすぎぬかけて見えさせたまう。

地誌あんを按むずるに、摩耶山は武庫郡六甲山の西南に当りて、雲白そびく聳そびえたる峰の名なり。山の蔭たきだにに滝谷ありて、布引ぬのびきの滝の源というも風情なるかな。上るに三条の路あり。一はその布引より、一は都賀野村上野より、他は篠原しのはらよりす。峰の形峻しゅんげんきく巖崎いづみ嶮あしきたりとぞ。しかも海を去ること一里ばかりに過ぎざるよし。漣さざなみの寄する渚なぎさに桜貝の敷しきたえ妙も、雲高き夫人ぶにんの御手みての爪紅つまべにの影なるらむ。

伝え聞く、摩耶山 忉利天王寺 夫人堂の御おん像すがたは、その昔梁いにしえの武帝、女人の産に悩む

者あるを憐み、仏母摩耶夫人の影像を造りて大功德を修しけるを、空海上人入唐の時、我が朝に齋き帰りしものとよ。

知ることの浅く、尋ぬること怠るか、はたそれ詣する人の少きにや、諸国の寺院に、夫人を安置し勸請するものを聞くこと稀なり。

十歳ばかりの頃なりけん、加賀国石川郡、松任の駅より、畦路を半町ばかり小村に入込みたる片辺に、里寺あり、寺号は覚えず、摩耶夫人おわします。なき母をあこがれて、父とともに詣でしことあり。初夏の頃なりしよ。里川に合歓花あり、田に白鷺あり。麦やや青く、桑の芽の萌黄に萌えつつも、北国の事なれば、薄靄ある空に桃の影の紅染み、晴れたる水に李の色蒼く澄みて、午の時、月の影も添う、御堂のあたり凡ならず、畑打つものの、近く二人、遠く一人、小山の裾に数うるばかり稀なりしも、浮世に遠き思ありき。

本堂正面の階に、斜めに腰掛けて六部一人、頭より高く笈をさし置きて、寺より出せしなるべし。その厨の方には人の氣勢だになきを、日の色白く、梁の黒き中に、渠ただ一人抹茶のみて、打憩ろうていたりけり。

その、もの静に、謹みたる状して俯向く、背のいと瘦せたるが、取る年よりも長き月日

の、旅のほど思わせつ。

よし、それとても臃^{おぼろげ}気ながら、彼^{かしこ}処なる本堂と、向つて右の方に唐戸一枚隔てたる夫^{かた}人堂の大なる御廚子の裡に、綾^{あや}の几帳^{きちよう}の蔭なりし、跪^{ひざまず}ける幼きものには、すらすらと丈高う、御髪^{おぐし}の艶^{つや}に星一ツ晃々^{きらきら}と輝くや、ふと差^さ覗^{しのぞ}くかとして、拜^ままれたまいぬ。浮べる眉^{まゆ}、画^{えが}ける唇^{くちくち}、したたる露^{おん}の御まなざし。瓔^{ようらく}珞^{らく}の珠の中にひとえに白き御胸を、来よとや幽^{かすか}に打^{うち}寛^{くわん}ろげたまえる、気高く、優しく、かしこくも妙^{たえ}に美しき御姿、いつも、まのあたりに見参らす。

今思出でつと言うにはあらねど、世にも慕^{たのしみ}わしくなつかしきままに、余^よ所^{ところ}にては同じ御^み堂^{どう}のまたあらんとも覚えずして、この年^{とし}月^{つき}をぞ過^{すご}したる。されば、音にも聞かずして、摂津、摩耶山の忉利天王寺に摩耶夫人の御堂ありしを、このたびはじめて知りたるなり。西本の君の詣でたる、その日は霞の霰^{たなび}霰^ひきたりによ。……音^{おと}信^{しづめ}の来しは宵月なりけり。

あんころ餅

松^{まつ}任^{とう}のついでなれば、そこに名物を云うべし。餅あり、あんころと云う。城下金沢よ

り約三里、第一の建場たてばにて、両側の茶店軒を並べ、件くだんのあんころ餅を鬻ひぐ……伊勢に名高き、赤福餅、草津のおなじ姥うばケ餅、相似たぐいたる類のものなり。

松任にて、いずれも売競うなかに、何某なにがしというあんころ、隣国他郷にもその名聞ゆ。

ひとりその店にて製する餠あん、乾かず、湿らず、土用の中うちにても久しきに堪えて、その質を変えず、格別の風味なり。其家そこのなにかし、遠き昔なりけん、村隣りに尋ぬるものありと

て、一日宵あるひのほどふと家を出でしがそのまま帰らず、捜すに処無きに至りて世に亡きものに極きりぬ。三年の祥月しょうつき命日の真夜中とぞ。雨強く風烈はげしく、戸を揺り垣を動かす、物もののすさま

凄あじく暴るる夜なりしが、ずどんと音して、風の中より屋の棟おりたに下立つものあり。ば

たりと煽あおつて自おのずから上に吹開く、引窓の板を片手に擡もたげて、倒さかさまに内を覗のぞき、おくの、おくのとて、若き妻の名を呼ぶ。その人、面青おもてく、髯ひげ赤し。下に寝いねたるその妻、さばかりの

吹降りながら折からの蒸暑なんじさに、いぎたなくて、搔かき巻まきを乗出でたる白き胸に、暖き息、

上よりかかりて、曰く、汝なんじの夫なり。魔道に赴きたれば、今は帰らず。されど、小児等こどもらも不便ふびんなり、活計たつきの術すべを教うるなりとて、すなわち餠あんの製法を伝えつ。今はこれまでぞと云

うまに、頸くびを入れてまた差覗くや、たちまち、黒雲を捲まき小さくなりて空高く舞上る。

傘からかさの飛ぶがごとし。天赤かりしとや。天狗相伝てんぐの餅というものこれなり。

いつぞやらん、その松任より、源平島、水島、手取川を越えて、山に入る、辰口といふ小さな温泉に行きて帰るさ、件の茶屋に憩いて、兎心に、ふと見たる、帳場にはあらず、奥の別なる小さき部屋に、黒髪の乱れたる、若き、色の白き、痩せたる女、差俯向きて床の上に起直りていたり。枕許に藥などあり、病人なりしなるべし。

思わずも悚然せしが、これ、しかしながら、この頃にはあらかじかし。

今は竹の皮つつみにして汽車の窓に売子出でて旅客に鬻ぐ、不思議の商標つけたるが彼の何某屋なり。上品らしく気取りて白餡小さくしたるものは何の風情もなし、すきとしたる黒餡の餅、形も大に趣あるなり。

夏の水

松任より柏野水島などを過ぎて、手取川を越ゆるまでに源平島と云う小駅あり。里の名に因みたる、いづれ盛衰記の一条あるべけれど、それは未だ考えず。われ等がこの里の名を聞くや、直ちに耳の底に響き来るは、松風玉を渡るがとき清水の声なり。夏の水とて、北国によく聞ゆ。

春と冬は水湧かず、椿の花の燃ゆるにも紅を解くばかりの雫もなし。ただ夏至のはじめの第一日、村の人の寝心にも、疑いなく、時刻も違えず、さらさらと白銀の糸を鳴して湧く。盛夏三伏の頃ともなれば、影沈む緑の梢に、月の浪越すばかりなり。冬至の第一日に至りて、はたと止む、あたかも絃を断つごとし。

周囲に柵を結いたれどそれも低く、錠はあれど鎖さず。注連引結いたる。青く艶かなる円き石の大なる下より溢るるを樋の口に受けて木の柄杓を添えあり。神業と思うにや、六部順礼など遠く来りて賽すとして、一文銭二文銭の青く錆びたるが、円き木の葉のごとくあたりに落散りしを見たり。深く山の峽を探るに及ばず。村の往来のすぐ路端に、百姓家の間にあたかも総井戸のごとくにあり。いつなりけん、途すがら立寄りて尋ねし時は、東家の媼、機織りつつ納戸の障子より、西家の子、犬張子を弄びながら、日向の縁より、人懐しげに瞻りぬ。

甲冑堂

橘南谿が東遊記に、陸前国荻田郡高福寺なる甲冑堂の婦人像を記せるあり。

奥州白石しろいしの城下より一里半南に、才川と云う駅あり。この才川の町末に、高福寺という寺あり。奥州筋近來の凶作にこの寺も大破に及び、住持となりても食物乏しければ僧も不住すまず、明寺あきてらとなり、本尊だに何方いずかたへ取納めしにや寺には見え、庭は草深く、誠に狐梟こきようのすみかというも余あまりあり。この寺中に又一ツの小堂あり。俗に甲冑堂という。堂の書附には故将堂とあり、大さ纔おおきわずかに二間四方ばかり許の小堂なり。本尊だに右の如くなれば、この小堂の破損はいう迄もなし、ようように縁にさがり見るに、内に仏とてもなく、唯婦人ただの甲冑して長刀ながなたを持ちたる木像二つを安置せり。

これ、佐藤継信つぎのぶただのぶ、忠信兄弟の妻、二人だにて討死せしのち、その母の泣悲しむがいとしさに、我が夫の姿をまなび、老いたる人を慰めたる、優しき心をあわれがりて時の人木像に彫きざみしものなりという。

この物語を聞き、この像を拝するにそぞろに落涙せり。(略) かく荒れ果てたる小堂の雨風をだに防ぎかねて、彩色も云々うんぬん。

甲冑堂の婦人像のあわれに絵の具のあせたるが、遙はるけき大空の雲に映りて、虹にじより鮮あざや明かに、優しく読むものの目に映りて、その人あたかも活いけるがごとし。われらこの烈はげし

き大都會の色彩を視^{なが}むるもの、奥州辺の物語を読み、その地の婦人を想像するに、大方は安達^{あた}ヶ原の婆々^{ばばあ}を想い、もつぺ穿^はきたる姉^{あねえ}をおもい、紺^{ふんどし}の褌^{かかあ}の媽々^{かかあ}をおもう。同じ白石の在所うまれなる、宮城野と云い信夫^{しのぶ}と云うを、芝居にて見たるさえ何とやらん初^{はつがつ}鰹^{おアジス}の頃は嬉しからず。ただ南谿が記したる姉妹のこの木像のみ、外ヶ浜の沙漠の中にも緑水のあたり、花菖蒲^{はなあやめ}、色のしたたるを覚ゆる事、巴^{ともえ}、山吹のそれにも優^{まさ}れり。幼き頃より今もまた然^{しか}り。

元禄の頃の陸奥千鳥には——木川村入口に燈^{あぶみずり}摺^{すり}の岩あり、一騎立^{だち}の細道なり、少し行きて右の方に寺^{かた}あり、小高き所、堂一字^{いちじう}、継信、忠信の両妻、軍立^{いくさだち}の姿にて相^{あい}双^{なら}び立つ。

軍^{いくさ}めく二人の嫁や花あやめ

また、安永中の続奥の細道には——故将堂女体、甲冑^{たい}を帯^たしたる姿、いと珍し、古き像にて、彩色の剥^はげて、下地なる胡粉^{べいふん}の白く見えたるは、

卯^うの花や緞^{おど}し毛ゆらり女武者

とするせりとぞ。この両様とも悉^{くわ}しくその姿を記さざれども、一読の際、われらが目には、東遊記に写したると同じ状^{さま}に見えていと床し。

しかるに、観聞志と云える書には、——齋川以西有羊腸、維石巖々、あしを
 足、かみひづめをやぶる、かみ毀蹄、かみ一高坂也、かみ是以馬憂_{ひとけんかんをいたむ}、かみ人痛嶮艱、かみ王勃
 所謂、関山難踰者、方是乎可信依、かみ土人称破_{どじんやれあぶみのさかとしようす}破_{やれあぶ}鎧坂、かみ破鎧
 坂東有一堂、かみ中置二女影、かみ身着戎衣服、かみ頭戴烏帽子、かみ右方
 執弓矢、かみ左方撫刀劍——とありとか。

この女像にして、もし、弓矢を取り、刀劍を撫すとせんか、いや、腰を踏張り、片膝押
 はだけて身構えているようにて姿甚だとのわず。この方が真ならば、床しきは半ば失せ
 去る。読む人々も、かくては筋骨逞しく、かみ膝節手ふしもふしくれ立ちたる、がんまの娘
 を想像せずや。知らず、この方はあるいは画像などにて、南谿が目あたり見て写しおけ
 る木像とは違えるならんか。その長刀持ちたるが姿なるなり。東遊記なるは相違あらじ。
 またあらざらん事を、われらは願う。観聞志もし過ちたらんには不都合なり、王勃が謂
 う所などはどうでもよし、心すべき事ならずや。

近頃心して人に問う、甲冑堂の花あやめ、あわれに、今も咲けるとぞ。

唐土の昔、咸寧の吏、韓伯が子某と、王蘊が子某と、劉耽が子某と、いずれ
 華胄の公子等、相携えて行きて、土地の神、蔣山の廟に遊ぶ。廟中数婦人の像あり、

白^{はく}皙^{せき}にして甚だ端正。

三人この処に、割籠^{わりこ}を開きて、且つ飲み且つ大^{おお}に食う。その人も無げなる事、あたかも妓^{かたわら}を傍^{かたわら}にしたるがごとし。あまつさえ酔に乗じて、三人おのおの、その中^{うち}三婦人の像^{ゆびさ}を指し、勝手に選^{より}取りに、おのれに配して、胸を撫^なで、腕^{うで}を圧^おし、耳を引く。

時に、その夜の事なりけり。三人同じく夢む。夢に蔣^{しょうこう}侯、その伝^{さんだいふ}教^{くわう}を遣わして使者の趣^{もう}を白^もさす。曰く、不束^{ふつつか}なる女ども、猥^{みだり}に卿等^{けいら}の榮顧^{けいこ}を被る、真に不思議なる御

縁^{ゆかり}の段、祝着^{しゆく}に存ずるものなり。就^つては、某^{それ}の日、あたかも黄道^{きつしん}吉辰^{きちしん}なれば、揃^{そろ}つて方^か々^{たがた}を婿君にお迎え申すと云う。汗冷たくして独りずつ夢さむ。明くるを待ちて、相見^{あひま}て

口を合^あわするに、三人符を同じゅうしていささかも異なる事なし。ここにおいて青くなりて大^{おお}に懼^{おそ}れ、斉^{ひと}しく牲^{にえ}を備えて、廟^{まへ}に詣^まつて、罪を謝し、哀を乞^こう。

その夜また俱^{とも}に夢む。この度や蔣侯神、白銀の甲冑^{かこう}し、雪のごとき白馬に跨^{また}り、白羽^{はくう}の矢^やを負^おいて親しく自^{みづか}ら枕^{くさ}に降^{くだ}る。白き鞭^{むち}をもつて示して曰く、変更^{まへり}の議^ぎ罷^ま成^{なり}らぬ、御身^{おんみ}等^ら、我が処女^{むすめ}を何と思う、海老茶^{えびちや}ではないのだと。

木像^{しん}、神あるなり。神なければも靈あつて来り憑^よる。山深く、里幽^{ゆう}に、堂宇^{どうう}廃^{はい}頽^{たい}して、いよいよ活けるがごとくしかるなり。

明治四十四（一九一）年六月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成8」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成8）年5月23日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第二十八卷」岩波書店

1942（昭和17）年11月30日発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号586）を、以下の箇所を除いて大振りにつくっています。

安達《あだち》ケ原の婆々《ばばあ》を想い

入力：門田裕志

校正：noriko saito

2008年10月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

一景話題

泉鏡花

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>